

タイトル	日本仏教通史の枠組み：「新アジア仏教史」日本編 刊行に寄せて
著者	追塩，千尋；OISHIO, Chihiro
引用	北海学園大学人文論集(59)：1-27
発行日	2012-03-30

日本仏教通史の枠組み

——『新アジア仏教史』日本編刊行に寄せて——

追 塩 千 尋

はじめに

2010年から2011年にかけて、『新アジア仏教史』（以下『新』）全15巻が刊行された（佼成出版社）。これは1972年から1976年にかけて同じ出版社から刊行された『アジア仏教史』（以下『旧』）全20巻以後、およそ40年に及ぶ間の研究成果を踏まえ全く新たに執筆された仏教通史である。このうち、日本編は『旧』は全9巻（1972～1976年）であったが、『新』は全5巻（2010～2011年）と量的には『旧』よりも縮小されている。いずれにせよ、久しぶりに刊行された大部な日本仏教の通史である。本稿では日本編に限って『旧』と比較しながら『新』の特色を確認し、日本仏教の通史を叙述する際にどのような枠組みが示されているのかについて探ってみた。

本書は通史を目指してはいても分担執筆であるため、内容に重複があるなど整合性の上では一人の著者による1冊ものの通史よりも枠組みは見えにくいかもしれない。しかし、『旧』同様各巻は責任編集者の日本仏教史の認識や視点が色濃く反映されているので、その辺を検討の際に重視したい。なお、後述するように『新』は、前近代仏教に与えている伝統的な評価である古代（国家仏教）、中世（民衆仏教）、近世（葬式仏教）の見直しを重視しているところから、本稿では主として前近代を中心とし、近現代は必要最低限のことを触れる程度にすることを了承されたい。

また、『新』においては通史形態がとられているのは第4巻までで、第5巻は「現代仏教の可能性」というタイトルが付され、年表などもなく通史

形態にはなっていない。しかし、この巻は通史から漏れたり通史には組み込みにくいテーマが盛り込まれており(目次は注⑩参照)、日本仏教史の中の部門史ともいえる章もあるので看過はできない。ただ、本稿は通史の枠組みの検討を主とするので、直接には検討の対象とはしないことも併せて了承されたい。

また、日本編以外は、『旧』はインド編6巻、中国編5巻であったのに対し、『新』はインド編・中国編にそれぞれ3巻を当て、残り4巻は「スリランカ・東南アジア」「中央アジア」「チベット」「朝鮮半島・ベトナム」となっている。『旧』では、これらの諸国は自立した巻が立てられてはいながらも、それぞれはインド編・中国編に組み込まれていたのとは対象的である。構成上において比較するなら、『旧』はインド・中国・日本の三国仏教史的枠組みが色濃かったのに対し、『新』はその枠組みの克服を目指していることが知られる。日本編以外については以上の点だけ指摘しておき、全体構成に関する検討は今後の課題としたい。

1、『旧』の特質

『新』について述べるに当たって、その前身である『旧』の特質について確認しておきたい。

(1) 『旧』刊行前後

『旧』は、戦後の日本仏教史の研究成果を集約した1970年代を代表する日本仏教史であった。戦後に刊行されたものに限定した場合、『旧』以前における一冊ものを除く複数巻からなる日本仏教史の通史は、辻善之助『日本仏教史』全10巻(1944～1955年)と家永三郎・赤松俊秀・圭室諦成編『日本仏教史』全3巻(1967年、法蔵館)位なものであった。他に花山信勝他監修『日本の宗教』全4巻(1961～1962年、宝文館)が目につく程度である。しかし、『日本の宗教』は新興宗教(天理教)と日本仏教12宗派の解説ともいべきもので、宗派史として日本仏教を描くという伝統的叙述形

態の延長上にあるものといえよう。辻氏のものはいまさというまでもないが、日本仏教史の百科全書的役割を果たし続けている書であり、一個人による通史として分量的にもこれを越えるものは現在まで著されていない。もっとも、辻氏の叙述は明治期の入り口で終了している。その点家永三郎他編『日本仏教史』は、史学の立場から仏教そのものの動向に徹して戦後まで叙述した点で画期的で、今でも利用価値が失われていない1960年代を代表する日本仏教史といえる。

『旧』刊行後の通史の動向に目を転ずるならば、3点ほどの傾向が指摘できよう。第一は、1980年代、90年代それぞれに日本仏教通史あるいはそれに準ずる書が刊行されていることである。具体的には、速水侑他『日本仏教史』全4巻（1987～1998年、吉川弘文館）⁽¹⁾、川岸宏教他編『論集日本仏教史』全11巻（1986～1999年、雄山閣出版）⁽²⁾、高取正男他編『図説日本仏教史』全3巻（1980～1981年、法蔵館）、太田博太郎他監修『図説日本の仏教』全6巻（1988～1990年、新潮社）、田村円澄他編『図説日本仏教の歴史』全6巻（1996年、佼成出版社）などが上げられよう。

速水侑他『日本仏教史』（但し中世は分担執筆）と田村円澄他編『図説日本仏教の歴史』は、時代毎に一人が担当する形式になっている。また、川岸宏教他編『論集日本仏教史』は各巻二部構成で、第一部は概説、第二部は各論、という形がとられている。また、図説ものが継続的に刊行されていることが目に付くが、こうした企画は、読者の理解を助ける上で意味があるといえるが、仏教美術史や展覧会の展示図録類とは異なる特質をどのように持たせるのかが、常につきまとう課題といえよう。

第二は、通史の形態は取られていないが、僧伝史・宗派史を中心として日本仏教を描くという伝統的叙述形態に見合ったシリーズが刊行されていることである。平岡定海他編『日本仏教基礎講座』全7巻（1978～1980年、雄山閣出版）、平岡定海他編『日本名僧論集』全10巻（1982～1983年、吉川弘文館）、田村円澄他編『日本仏教宗史論集』全10巻（1984～1985年、吉川弘文館）、本郷真紹他編『日本の名僧』全15巻（2003～2005年、吉川弘文館）などが該当しよう。

第三は、日本仏教史の各論あるいは仏教史に関連するテーマや、日本史の隣接諸科学での仏教関係研究の成果の集成に関わる企画である。和歌森太郎他編『山岳宗教史研究叢書』全18巻(1975～1983年、名著出版)、五来重他編『講座日本の民俗宗教』全7巻(1979～1980年、弘文堂)、竹田聰洲他編『葬送墓制研究集成』全5巻(1979年、名著出版)、萩原龍夫他編『民衆宗教史叢書』全32巻(1982～1999年、雄山閣出版)、桜井徳太郎他編『仏教民俗学大系』全8巻(1986～1993年、名著出版)、大隅和雄・西口順子編『女性と仏教』全4巻(1989年、平凡社)、村山修一他編『陰陽道叢書』全4巻(1991～1993年、名著出版)、今野達他編『岩波講座日本文学と仏教』全10巻(1993～1995年、岩波書店)、伊藤博之他編『仏教文学講座』全9巻(1994～1996年、勉誠出版)などである。主に民俗学・文学分野面での仏教に関わる研究や民間信仰・墓制・女性と仏教など、日本仏教史の主流とは認識されていないか通史の叙述に組み込みにくい課題を扱ったものであることが、それぞれのタイトルからうかがわれよう。もっとも、これらのテーマは通史の中で扱われていない訳ではないが、扱われ方が必ずしも十分とはいえないため、改めて別個に取り出し、詳細化を図ったものともいえよう。これらの成果は時期的に見ても『旧』以降であるので、どのように取り入れるのかは『新』の課題であったといえる。

その他、日本仏教研究所編『日本仏教の心』全10巻(1987～1988年、ぎょうせい)、奈良康明編『日本人の仏教』全10巻(1987～1988年、東京書籍)なども取り上げるべきであろうが、『旧』刊行後、1980～1990年代に日本仏教史の通史的な書が刊行され続けていたことを確認するに止めておきたい。

(2) 『旧』の特質

『旧』の特質を述べるに際して、表一で新旧の目次を時代毎に対称させてみた。なおこれ以後、新旧共に巻数・章を示す時は、例えば「『アジア仏教史』第1巻第1章」を表す場合は、「『旧』1①」のような表記法を用いることを了承されたい。

表1 新旧『アジア仏教史』日本編目次比較表

* 節・項などの細目は省略

* 『新』の各巻には実質編集者である編集協力者名を入れた

旧（笠原一男編）	新（末木文美土編）
1, 飛鳥・奈良仏教（国家と仏教）1972年 301頁 ①奈良仏教の経論（目幸黙僊・平井俊栄） ②仏教の伝来（田村円澄） ③国家仏教の成立（田村円澄） ④仏教と道教（下出積興） ⑤国家仏教の発展（井上薫） ⑥南都六宗と民間仏教（井上薫） 2, 平安仏教（貴族と仏教）1974年 400頁 ①平安仏教の経論（田村晃祐・柏木弘雄・石上善応） ②平安仏教の成立（蘭田香融・下出積興） ③平安仏教と貴族文化（蘭田香融・下出積興・速水侑・高木豊） ④平安仏教の民衆的展開（大橋俊雄・高木豊） ⑤古代社会と諸信仰（速水侑） ⑥道教思想の背景（下出積興）	1, 日本仏教の礎（大久保良峻）2010年 477頁 ①仏教の伝来と流通（吉田一彦） ②奈良仏教の展開（曾根正人） ③最澄・空海の改革（大久保良峻） ④仏教の日本化（上島亨） ⑤神仏習合の形成（門屋温） ⑥院政期仏教の展開（三橋正） 特論 女性と仏教（勝浦令子） コラム「法隆寺」（新川登亀男）, 「天平写経」（杉本一樹）, 「空海入唐の目的」（藤井淳）, 「浄土信仰の一視点」（梯信暁）, 「舍利信仰」（ブライアン・小野坂・ルパート）, 「両界曼荼羅の変成」（富島義幸）, 「恋と仏教」（石井公成）
3, 鎌倉仏教1（民衆と念仏）1972年 288頁 ①鎌倉時代と鎌倉仏教（笠原一男） ②浄土の教え（石上善応） ③法然と浄土宗教団の形成（大橋俊雄） ④親鸞と真宗教団の形成（笠原一男） 4, 鎌倉仏教2（武士と念仏と禅）1972年 308頁 ①阿弥陀経の浄土思想（石上善応） ②一遍と時宗教団の形成（大橋俊雄） ③經典から見た禅の思想（菅沼晃） ④鎌倉禅の成立（今枝愛真） 5, 鎌倉仏教3（地方武士と題目）1972年 342頁 ①法華経と涅槃経の教え（田村完誓・菅沼晃） ②日蓮と日蓮宗教団の形成（高木豊） ③南都仏教の復興（吉田文夫） ④中世社会と諸信仰（速水侑） ⑤仏教系神道（下出積興） 6, 室町仏教（戦国乱世と仏教）1972年 377頁 ①室町時代における禅宗の発展（今枝愛真） ②室町時代における浄土宗の発展（大橋俊雄） ③室町時代における時宗の発展（大橋俊雄） ④真宗の発展と一向一揆（笠原一男） ⑤日蓮宗の発展と法華一揆（中尾堯）	2, 躍動する中世仏教（松尾剛次）2010年 445頁 ①顕密仏教の展開（蓑輪顕量） ②新仏教の形成（前川健一） ③仏教者の社会活動（松尾剛次） ④儀礼と神話（伊藤聡） ⑤室町文化と仏教（原田正俊） ⑥一揆と仏教（神田千里） 特論 変貌する日本仏教観（佐藤弘夫） コラム「聖教の世界」（阿部泰郎）, 「未来記」（小峯和明）, 「持経者」（菊地大樹）, 「夢」（河東仁）, 「禅画の世界」（島尾新）, 「地図」（黒田日出男）, 「立川流」（彌永信義）

7, 江戸仏教(体制仏教と地下信仰) 1972年 302頁 ①幕藩体制下の仏教(圭室文雄・小栗純子) ②地下信仰 ― その源流と実態 ― (小栗純子・大浜徹也) ③はやり神仏と俗信仰(宮田登) ④神社への民俗信仰(山本武夫) ⑤教祖信仰の誕生(小栗純子)	3, 民衆仏教の定着(林 淳) 2010年 459頁 ①キリシタンと仏教(黒住真) ②近世国家と仏教(曾根原理) ③仏教と江戸の諸思想(前田勉) ④教学の進展と仏教改革運動(西村玲) ⑤幕府寺社奉行と勧進の宗教者 ― 山伏・虚無僧・陰陽師 ― (林淳) ⑥「葬式仏教」の形成(岩田重則) 特論Ⅰ 仏像を通して見る古代日本の仏教(長岡龍作) 特論Ⅱ 仏教建築の変遷(藤井恵介) コラム「秀吉の朝鮮征服戦争と仏教」(大桑 齊), 「天海の遺産 ― 天海版一切経木活字」(水上文義), 「文人と仏教 ― 宝暦期, 京に於ける文人僧の役割」(中野三敏), 「黄檗版大蔵経」(渡辺麻里子), 「血盆経」(松下みどり), 「四国八十八ヶ所札所と空海の十大弟子画像」(真鍋俊照), 「若冲の仏画」(辻惟雄)
8, 近代仏教(政治と宗教と民衆) 1972年 328頁 ①近代社会における教派神道の発展(小栗純子) ②近代社会におけるキリスト教の発展(森岡清美) ③近代社会における国家神道の形成(村上重良) ④近代社会における仏教の実態(池田英俊) 9, 現代仏教(信教の自由と仏教) 1976年 324頁 ①総論(松野純孝) ②現代社会と大本教(村上重良) ③現代社会と創価学会(笠原一男) ④現代社会と立正佼成会(松野純孝)	4, 近代国家と仏教(佐藤弘夫) 2011年 411頁 ①明治維新と仏教(谷川稜) ②近代仏教の形成と展開(大谷栄一) ③仏教者の海外進出(藤井健志) ④国民国家日本の仏教(島蘭進) ⑤戦争と仏教(末木文美士・辻村志のぶ) ⑥戦後仏教の展開(島田裕巳) 特論 仏教研究方法論と研究史(末木文美士) コラム「戦後宗教史研究と近代化論」(幡鎌一弘), 「日本におけるダルマバーラ」(佐藤哲朗), 「北海道の仏教」(佐々木馨), 「オカルティズムと仏教」(吉永進一), 「靖国」(三土修平), 「水子供養」(清水邦彦), 「ベルナル・フランクの日本仏教研究」(ジャン・ノエル・ロベール)
合計頁数 2970頁	1792頁(『旧』の6割程)

『旧』の特質の第一は、鎌倉仏教の巻が全体の三分の一を占めており、中世仏教のウェイトが高いこと。第二は、江戸仏教の巻にその兆候が見られるが、近現代は仏教史の枠を広げた宗教史の体裁になっていること。以上のことがまずは目立つ。仏教史の枠を広げるという点では、前近代では下出積興氏による「道教」が1・2巻において独立した章が立てられており、『新』には見られないユニークさとなっている。

さて、仏教を含めた日本宗教史に関してであるが、第二の特質は、日本

編の編集者である笠原一男氏の日本宗教史観が反映された結果であると思われる。笠原氏による各巻に付された「はじめに」は、日本編全巻共通の文章とそれぞれの巻の構成についての説明からなっている。

全巻に共通して付された文章では、仏教は日本人の価値観の世界の王座を占めており、新しい時代に対応して常に新しい時代の価値基準として生きるための努力を続けたとし、各時代を概観する。すなわち、仏教は奈良時代に定着し、平安期の天台・真言は四百年を通じて古代人の価値観を形成した。鎌倉時代には新仏教が価値観の世界に登場し、江戸から明治、そして敗戦を境とする近代から現代へのそれぞれの転換期には新しい民衆宗教が複数生まれたとする。

また、各巻毎の説明においては、1～5巻までは各章の狙いを記すのみで評価めいた文言はみられないが⁽³⁾、第6巻以降は趣を異にする。すなわち、第6巻室町仏教は鎌倉仏教の発展とし、第7巻江戸仏教は鎌倉時代以来生き生きと生きてきた日本仏教の活動が停止し、幕藩権力と癒着することにより仏教の使命と役割が枯渇した時代、とする。第8巻近代仏教は、近代社会の「宗教」のうち教派神道・キリスト教・国家神道・仏教などを取り上げるとし、前述のように仏教史というよりも宗教史の体裁になる。そして、仏教に関しては、幕藩体制と癒着した仏教の近代社会で歩んだ道を探る、としている。第9巻現代仏教は、現代は数多くの新宗教が大幅な発展を飛躍的に成し遂げた時代と規定し、教派神道以後の新しい民衆宗教たる大本教・創価学会・立正佼成会などに関する誕生と発展の歴史を扱うとする。

以上の構成は、時代の転換期にはそれに対応する価値観を提示する新しい宗教が複数誕生する、という転換期宗教史観ともいうべき笠原氏の見解に基づいていることが知られる。氏の構想では、鎌倉期・明治維新时期・敗戦時の三つが重要な転換期として捉えられ、そのため鎌倉新仏教、明治期の教派神道、敗戦後の新宗教の動向が重視されることになるのである。

氏の構想は、『旧』以前の書に既に示されていた。川崎庸之氏との共編ではあるが、『体系日本史叢書』の一冊である『宗教史』（1964年、山川出版

社)の「まえがき」には、転換期の宗教に力点が置かれることが記されている⁽⁴⁾。その後笠原氏の構想は『転換期の宗教——真宗・天理教・創価学会——』(1966年、日本放送出版会)で明瞭に示され、同様の構想に基づく編著書が1970年代に何点か出された⁽⁵⁾。また、氏の編集のもとで、氏が中心となっていた日本宗教史研究会に集ったメンバーを中心として「日本人の行動と思想」シリーズ(評論社)⁽⁶⁾と「日本宗教史研究叢書」(吉川弘文館)⁽⁷⁾が1980年代まで継続して刊行された。前者は日本宗教史の各論編、後者は研究編的位置を占める。これらは、単線的で平板ともいえる笠原氏の宗教史の構想を補い深化させ、さらに様々な方向に発展する可能性を秘めたシリーズとして完結が期待された。しかしながら、途中で止まったままの形になったのは日本宗教史研究会の活動の状況⁽⁸⁾からしても惜しまれる。

なお、「日本人の行動と思想」シリーズと同時に、笠原氏と共に金岡秀友氏が編者となり「東洋人の行動と思想」シリーズが1972年から刊行が始まった(評論社)。これも25冊が計画されていたようであるが、1977年に15冊目が刊行されたのを最後に止まっている。金岡氏は『旧』の監修者の一人でもあったことから、『旧』を補うべく計画されたインド・中国・日本に渉る壮大な叢書であったと思われる。

さて、『旧』の特質に戻るなら、第一・第二に加えて、第三に、第5巻までではあるが、当該時期に展開する宗派が依拠した經典の解説がなされていること。第四に、執筆者は40歳前後(平均40代半ば)の若手・中堅が中心であること。第五に、年表・参考文献・索引が完備され読者の便宜が図られていること、などが指摘できる。經典の解説は『新』には継承されていないので、『旧』の特質として評価してよい。しかしながら、經典解説は宗派の説明の補足の意味を有していたため、新宗派が出てこない室町以降はそうした試みがされていない。そこに『旧』は、宗派を重視して構成されていたことが改めて知られるのである。

以上の特質を踏まえ、更に各巻に付されたサブタイトルに注目するなら、『旧』における通史としての日本仏教史の構想・枠組みが明瞭となる。すなわち、飛鳥・奈良期(国家仏教)→平安期(貴族仏教)→鎌倉期(民衆・下

級層の仏教）となる。続いて、室町期は鎌倉新仏教の展開（教団化）の時代、江戸期は教団として確立した新仏教は体制仏教として定着・安定するが、一方には地下に潜伏を強いられた宗教もあった。近代は国家神道と他宗教の確執と妥協の歴史が語られ、戦後は戦時下の弾圧・抑圧などから解放された新興宗教について仏教系を中心に叙述される。

以上の枠組みは、近代以降はしばらく措くとして、前近代（特に中世まで）までは高校の日本史教科書などに描かれる枠組みや評価と重なる。教科書に記述されている枠組みは、伝統的枠組みとして今日においても根強く継承されている⁽⁹⁾。教科書においては部分的な事項の修正や付加などは別として、枠組みになどの大枠に関することなどはリアルタイムで学会の研究動向が反映されることはなく、20～30年のギャップがあるとも言われる。とはいえ、日本仏教史に関する研究の進展と評価や枠組みの見直しが提唱されて久しいにもかかわらず、教科書の記述は少なくとも半世紀前から変化がないのは改めて問題とすべきであろう。いずれにせよ、『旧』は今日の教科書的枠組みと同様の枠組みで構成された1970年代における日本仏教通史を代表するものである、といえよう。

2、『新』の特質（その1）——形態面で——

最初に日本編を含む『新』全体の狙い（基本方針）について、第1巻（「仏教出現の背景」2010年）の奈良康明氏の「序」から引用しておく。これまでのように教理・思想に限定しない、ということに続けて、

関連学問諸分野の新しい研究業績を幅広く踏まえつつ、人びとの社会生活のなかに支えられ、伝承されてきた仏教の歴史を広く思想と文化を統合する面からとらえ、現代における新しい仏教史の構築を目指す。とされる。ここに掲げられた目標が、実際にどのように実現されているのかの検証が求められるのである。

(1) 『旧』との形態上の比較

最初に、表一を中心に主として形態上の『新』の特色を、『旧』と比較しながら探してみたい。

第一は、分量の問題である。『旧』が全9巻であったのに対し、『新』は通史部分では4巻と巻数的には半分以下になったことである。さらに、古代・中世・近世・近現代に1巻ずつ当てているようにバランスが取れ、『旧』において中世が鎌倉仏教を含め4巻を占めていたような偏りはない。また、『新』は巻数的には『旧』の半分以下であるとはいっても、頁数は各巻が『旧』よりも厚いため全体の分量は『旧』の6割ほどとなり、巻数ほどの量的減少はない。

『新』『旧』ともに1巻として対応するのが、近世である。その頁数は『旧』が302頁であるのに対し、『新』は459頁と1.5倍ほどの分量に増えている。ちなみに、『旧』の近世・近現代編の合計は954頁で『新』のそれは870頁となり、分量的にはこれらの時代は両者にはさほどの開きがないことが知られる。したがって、『新』は『旧』よりも古代・中世部分を圧縮し、近世・近現代部分を充実させた、といえよう。

第二に、『新』各巻に付された表題は、『旧』のサブタイトルと比較すると明らかに異なる。『旧』の構成は日本仏教を叙述する上での伝統的な枠組みに沿った形態が取られているのに対し、『新』はそれとは異なる方向が目指されていることがうかがえる。それがどのような方向であるかは後述するが、第一のこととも絡み日本仏教史の枠組みの見直しに関わる重要な点である。その点で、近現代は『旧』は仏教史というよりもその枠を広げた宗教史の体裁が取られていたが、『新』では仏教に即したテーマが立てられている点で文字通りの仏教史が目指されていることがうかがえる。

第三として、通史の中に組み込みにくい通時代的なテーマや方法論に関わることを「特論」として扱い、通史の叙述からはこぼれ落ちがちな興味深い事項を「コラム」で補うなどの様々な工夫がなされている。もっとも、『新』1の特論、3の特論ⅠⅡは取り上げられたこと自体評価すべきではあろうが、本来は通史の叙述に組み込まれてしかるべきものでもある。結果

として別扱いになっていることに、通史におけるこうしたテーマの扱いが課題として残されている感を抱く⁽¹⁰⁾。

ここでコラムに関して要望を述べておきたい。今回コラムで取り上げられた項目自体の意義は大きいが、日本仏教を語るうえで自明の前提とされているような基本事項についても取り上げる必要があるのでは、と思われた。例えば、僧侶の名前（法名・房号・道号・諱などの区別と相互関係）・僧侶の呼称（入道・法師・新発意・禅師・律師・沙門・聖・上人など）の体系化・出家の手続きとその変遷・立宗の手続きとその変遷・僧侶の日常生活（特に常食の実態など）、などである。他にも多々あろうが、こうした辞典類を引いても容易に解答が導き出せず、さりとて概説類に叙述されることがなく、叙述されていたとしても部分的で叙述の中に埋没しがちな項目などは、改めて取り出して解説が欲しいところである⁽¹¹⁾。

第四に、『新』においても年表・参考文献・索引などが付され便宜が図られている点は『旧』と同じである。しかし、参考文献は章毎に記されている点で『旧』より詳細になった。年表はいずれの巻も全時代が示された上で当該巻の時代をそれぞれ詳しくする、という試みがなされている。そうした点で全時代における当該時代の位置が把握しやすい配慮がされている。ただし、『新』4⑥では、1973年のオイルショック以降は、真如苑・阿含宗・幸福の科学・オウム真理教などをはじめとする諸教団の動向が2000年代に入るまで言及されている。それにもかかわらず、第4巻の年表が、『旧』と同様に1971年で終わっているのは問題であろう。真如苑・阿含宗・幸福の科学・オウム真理教などの設立年などは最低限記載すべきであったと思われ、『旧』以降の40年ほどの間の仏教に関する事項が欠落した感を与えることになったのは惜しまれる。

第五は、執筆者は50歳代が多いため平均年齢は『旧』より若干上がるものの、『旧』同様若手・中堅が中心である。また、数は少ないながら『旧』では一人もいなかった外国人研究者（4巻まででは2人）が執筆者に加わっていることも、日本仏教研究の国際化の状況が反映されたものといえる（第5巻では2人の外国人研究者が執筆している）。

また、『旧』は日本宗教史研究会に集う研究者が中心であったのに対し、『新』は、主に日本仏教研究会及び日本仏教総合研究学会に集う研究者が中心となっている。この違いも『新』の特質を考える際に重要と思われるので、後述したい。

第六に、『旧』の「はじめに」は編集者である笠原氏による全巻共通の文章と各巻毎の簡単な内容紹介がなされていた。それに対し『新』では、日本編全体の構想に関しては編集委員である末木文美士氏による「序」が第1巻のみに載せられ、各巻の狙いに関しては、各巻毎の責任者である編集協力者による序が掲載されている。

末木氏の「序」においては、近年の仏教史研究の特徴・傾向などが数点にわたり指摘されている。すなわち、①これまでの鎌倉新仏教中心史観は顕密体制論により崩壊し、いわゆる旧仏教の動向に光が当てられるようになったこと、②中世ばかりでなくそれぞれ時代の仏教に独自の価値を認める研究が可能になったこと、③宗派単位の各別研究ではなく、仏教史の全体的解明が目指されていること、④歴史学・仏教学・文学・美術史など多分野の研究者による協力で大きな成果が生み出されていること、⑤日本のみならずアジアに開かれた研究であること、などである。そして、『新』はこうした傾向を推進・模索してきた日本仏教研究会に結集した研究者たちの協力による産物であることが述べられている。『旧』が日本宗教史研究会に結集した研究者たちによるものであったのに対し、『新』は日本仏教研究会に集った研究者たちによるもの、という訳である。そうした点で、日本仏教研究会の活動について節を改め触れておきたい。

(2) 日本仏教研究会の活動

日本仏教研究会は1991年に発足し、翌92年から年1回の研究発表会が開始された。世話人は、大久保良峻・佐藤弘夫・末木文美士・林淳・松尾剛次の5氏であった。会の目的として、これまでの日本仏教研究が宗派単位、史学、教理学など領域毎に個別に行われ相互交流を欠いていたことの反省に立ち、そうした状況を打破するために仏教を総合的に研究すること

が目指されていた。会の研究成果は雑誌形式の『日本の仏教』第Ⅰ期全6冊（1994～1996年、法蔵館）、第Ⅱ期全3冊（1998～2001年、法蔵館）として刊行された。

合計9冊にはそれぞれ特集的主题が掲げられており、それらを通じて提示された日本仏教研究の課題は多岐にわたっていた。その中で取り組むべき課題として目指されていた特徴的なことを拾い上げるなら、①脱領域（学際化）の促進、②各時期の仏教の評価の再検討（特に鎌倉仏教や近世仏教墮落史観など）、③アジアの中の仏教の位置付け、④日本文化の底流（アニミズム・密教・神祇や外来思想との交流）を探ること、などであった。前節で述べた『新』の末木氏の「序」における主張と文字通り重なるものである。

『日本の仏教』には新たな視点で日本仏教像の再構築を目指す、という意向が底流に流れていることが感じられる。その目指すべき方向性を正面から論じた論文として、佐藤弘夫「新たな日本仏教像の構築をめざして」（第Ⅱ期第2巻「日本仏教の研究法」所収、2000年11月）を取り上げておきたい。佐藤氏はこれまでの仏教史研究は史学と教学の立場から行われ、対象は思想・教理と共通しながらも互いの交流を欠いていたとする。しかし、近年問題関心と方法が多様化することにより研究状況が変化しているとする。

その多様化した関心と方法に関して具体的には、史学においては教団・制度・神祇・女性など研究の中心対象から外れていた事項に光が当てられ、資料も活用が金石文・大蔵経・墓石などにまで拡大していること、民俗学・美術史・文学・建築学などから成果が生み出されていること、教義を生み出す場としての芸能・法会などを通じて教義の流布と受容が問題視されていること、本覚思想・批判仏教・アジアの中の日本・禅を中心とした外国人研究者の新動向、などの新たな視座を上げる。こうした多様化への志向の背景には社会史の進出があるとし、その多様化における総合性・包括性への志向が窺える一例として、仏教民俗学による生活者の日常レベルでの仏教の機能の解明に関する研究に注目する。一方で、過去の家永三郎・井

上光貞氏らの強烈な問題意識を重要視し、これらを越える研究の必要性を説いている。

佐藤氏が把握した以上のような新しい研究動向が『新』に反映されていると思われるので、『新』の特質を考える上で留意しておきたい。日本仏教研究会は、その後『日本の仏教』が完結した年である2001年に解散した。翌2002年には日本仏教研究会の発展的解消として日本仏教総合研究学会が発足し、会誌『日本仏教総合研究』が年1回発行され現在に至っている。

さて、少々脇道に逸れることになるが、佐藤氏が上記論文の最後で触れた家永三郎(1913～2002)・井上光貞(1917～1983)氏らの再評価に関わることについて、別の視点で一言触れておきたい。家永・井上氏を始め、赤松俊秀(1907～1979)、笠原一男(1916～2006)の諸氏は、浄土教を中心とした鎌倉新仏教中心史観の形成・定着を担ってきた研究者とされている。しかしながら、末木氏の言葉を借りれば1975年の黒田俊雄氏による顕密体制論の提唱により、彼らが築いてきた枠組みは崩壊したことになる。

ここで確認したいことは、黒田氏による顕密体制論提唱以降、活発化する鎌倉仏教の見直しなどに関する研究動向を彼らがどう見ていたのか、という問題である。諸氏の没年からして、赤松氏を除いてはそうした研究動向を十分目にしていたはずであろうが、文章による発言が確認されるのは管見では家永氏のみである。家永氏は、顕密体制論の継承者と目される平雅行氏の著書『日本中世の社会と仏教』(1992年、塙書房)の書評において、次のように主張している⁽¹²⁾。①自分は宗派史的視点で親鸞・道元などを把握してはいない。彼らを一宗の開祖とするのは真実とはいえない。②思想史上の評価は量的=力的大小強弱の観点から行うべきではない。影響力の大小を基準として評価するなら顕密仏教が正統であるのは当然である。③精神的文化遺産の観点からは新仏教に大きな比重を割かざるを得ず、顕密仏教の精神的遺産としての意味はゼロに近い。以上が、書評を通じて示された家永氏の主張の要点である。

要は鎌倉仏教を質的に見た場合(思想史的评价において)、新仏教の諸師たちの意味が大きい、ということである。家永氏は顕密仏教が社会的に大

きな勢力であったことを認めつつも、自己の視点の修正の必要性は無いと考えているのである。氏は親鸞・道元らを宗教家ではなく、思想家として高い評価を与えている。その点で親鸞・道元らを中心とした鎌倉新仏教を評価することになるのは結果論であって、氏の意図はそこにはなかったことが知られる。したがって、氏を鎌倉新仏教中心史観の担い手に分類するのは必ずしも正確ではないし、氏にとっても不本意であったはずであることは改めて留意しておきたい。

自説の修正などは必要ない、という見解は他の諸氏も家永氏とほぼ同様であったと推察される⁽¹³⁾。これまでに構築されてきた新仏教の祖師たちの思想史・宗教史的意義はいささかも揺らぐことはなく、顕密体制論なる理論が主張されても二者択一にそれに取って代わられることもない、ということがそれまで鎌倉新仏教の研究を担ってきた諸氏の主張と思われるのである。事は実証レベルの不備をめぐる議論ではないだけに、家永氏に代表される見解は傾聴に値する主張であると思われる。

3、『新』の特質（その2）——各巻に即して——

前章では主として形態上の面での『新』の特質と、『新』が目指すべき方向性について確認した。『新』の叙述が、『旧』以降積み上げられてきた研究成果や、新しい視点を踏まえてなされることは当然であるが、これまでの伝統的枠組みを見直すことが目指されていた。名指しされていた伝統的評価は、古代（国家仏教）、中世（鎌倉新仏教中心史観）、近世（葬式仏教、形式化・墮落論）であった。それらの評価がどのように見直されているかについて、本章では各巻に即して確認していきたいと思う。但し、前述のように前近代を中心とし、近現代は必要最低限のことを触れるに止めることを了承されたい。また、各巻の各章は読み応えのある力作揃いであるが、そのすべてに言及する訳ではないことも併せて承知願いたい。

(1) 古代編

第1巻の巻名は「日本仏教の礎」とあるように、各章は日本的仏教の内容やその形成時期などが意識され、そのことが積極的に言及されている。編集協力者の大久保良峻氏は「序」において、古代においては平安仏教の論じ方が課題とし、密教と院政期仏教の重要性を説く。

以上のことを踏まえ、本巻に関しては国家仏教を検討した2章と、中世への見通しを論じた4・6章を主として取り上げたい。6～9世紀に日本的仏教は歴史的に形成されたとし、『日本書紀』に依拠した仏教史とは異なる記述を目指した第1章に続いて、第2章は奈良仏教の特質を中国仏教をモデルとした如法仏教にあると規定する。その如法仏教は、国家仏教と基層仏教とから成る。後者の基層仏教は、日本民衆仏教の祖形がうかがえる『日本霊異記』に典型的に見られ、その内実は祈禱仏教と人物信仰(聖徳太子・行基など)にあるとする。もう一つの国家仏教については呪力仏教であることを特色とし、天武期がその出発点で、その展開過程を『続日本紀』に卒伝が掲載されている6人の僧(道昭・道慈・行基・玄昉・鑑真・道鏡)の事績を通じて検討し、聖武期を終着点とする。さらに、南都六宗は天台・真言に刺激されて自立するので、そういう意味では平安期の仏教界の本流は顕密八宗体制であるとする。

奈良仏教を国家仏教一色では語らず、如法仏教なる上位の概念を設定し、その構成要素として国家仏教と民衆仏教を説明する、という点に新しさが見られる。

最澄・空海について密教を中心にして展開した第3章を経て、古代から中世への仏教の変化を見ることに主眼がおかれた第4章では第2章を踏まえ、いわゆる摂関・院政期仏教の動向が叙述される。執筆者の上島氏は、黒田俊雄氏の中世理解の全体像を批判的に継承するという立場から、黒田氏において十分でなかった点として、①顕教の果たした役割、②古代仏教と中世仏教の質的差異、③神祇の動向の検討、をあげる。中でも②に力点を置いているので、その点に絞ってみたい。氏は10世紀末から11世紀を中世仏教の形成期とする。その間の仏教界に見られる諸現象として、

権門寺院の成長の中での独自の「国家的」法会の整備と僧侶養成、寺院による王法仏法相依論の提唱、法会の大衆化、寺内の階層分化と職務分担(11世紀初頭に禅律僧の起源を求めていることなど)、三国世界観の確立、などを指摘し、それらを中世仏教の指標とする。中でも、特定の宗派に依拠せず諸宗の僧侶を集めた寺である法成寺に新たな寺院の姿を見、それが後三条天皇以後の寺に継承されていくことに注目している。

第6章は第4章とほぼ同時期を扱っているが、執筆者である三橋氏は院政期を平安時代に展開した諸要素の定着と中世以降の社会構造が形成された時代と規定する。そして、6章の目標を権力者との関係を重視した総合的仏教文化の叙述におく。その叙述は文字通り多彩であるが、院政期仏教（というよりも宗教）の顕著な特質として、法皇を頂点に据えた仏教国家の観をなしていること、活躍する僧侶は密教を中心に諸学・山林修行などを兼修することにより独自性を発揮していること、数量的信仰と地方伝播、陰陽道の発達、神社への年始詣・百度詣の開始、密教修法、臨終出家から死後出家へ、などのことが指摘される。そして、院政期の日本宗教史上の意義として、日本内部で熟成された日本仏教の一つの到達点であることや、自立した宗教家が他と競争しながら信者獲得に向け努力するという行為が初めて登場した時代、という評価が目を引く。

以上のような章により構成された古代編を見ると、南都六宗は奈良時代にはまだ確立していないこと、平安期は六宗を含んだ八宗体制の展開と捉えられていること、仏教展開の場としては平安京の比重が大きいがながらも南都・天台・真言織り混ぜた叙述がなされていること、中世仏教との区別の明確化が意図されていること、などが新鮮に感ぜられた。こうした点で従来の奈良期＝国家仏教、平安期＝貴族仏教とする図式からの脱却が目指され、一定程度成功しているといえよう。

(2) 中世編

中世編の編集協力者である松尾剛次氏による「序」では、これまでの研究成果を踏まえるなら中世において勢力を持っていたのは旧寺社勢力（顕

密仏教勢力)であるので、旧仏教寺社勢力や旧仏教改革派にスペースを割くことが述べられる。

氏の強調点は、第1章と氏自身の執筆である第3章に示されている。第1章は平安～院政期の仏教は顕密いずれかの範疇に収まる、という視点から、主として中世前半の顕密仏教の動向を概観したものである。そこでは、法会・修法・講などを媒介に仏教は貴族・武士・民衆に受容されたこと、顕密僧(寺僧)から出現した遁世僧らの活動、中世を通じて貫かれていた王法仏法相依の関係には三つの類型(相依・仏法為本、王法為本)があること、天台本覚思想とその展開過程への注目の必要性、信が強調されていくこと、などのことが触れられる。また、第3章では叡尊教団の多彩な社会活動(死者・非人救済、港湾管理と川・海支配、いわゆる社会事業など)について、松尾氏のこれまでの研究成果を踏まえて叙述される。

これまでの中心であった新仏教については、第2章で本巻中では比較的多くの頁が割かれて祖師の思想と教団の展開が述べられる。執筆者の前川氏は、日本仏教の特徴は律を重視していないところにあるとし、その淵源を鎌倉新仏教に見いだすことが出来るとしている。今日につながる日本仏教の特徴の一翼を新仏教が担っているという指摘は、新仏教に対する新たな位置付けとして注目される。

第4章では、平安末から室町期の神仏習合の展開の中で見られる中世日本紀・中世神話の生成と、神道流派の形成及びそれらの脱仏教化の傾向、などが述べられる。本章は、現在研究が活発化している脱領域的分野といえる。ただ、本地垂迹説における本地は仏菩薩に限定されている訳ではなく、そこが神に置き換わったとしても発想は本地垂迹説であることに変わりはない。したがって、神本仏迹の立場からの神道論を「反本地垂迹説」と表現するのはふさわしくない、という理解が現在では主流になりつつある。そうした動向の中で本章において、「反本地垂迹説」という語が留保条件なしで使用されているのは気になるところである。

第5章は、室町文化と仏教の関係について、禅宗以外の顕密諸宗も無視しないことと、北山・東山文化のみならず義持・義教期も重視する、とい

う視点で論ぜられている。しかしながら、実際は禅宗文化が中心となっている観は否めない。ただ、禅宗が禅宗文化へと転換する様が総合的に捉えられていること、室町殿(将軍在職の有無は問わない幕府権力の中心人物)の持つ権力のもとでの文化的営みのなかで、武家と禅宗文化が公家たちの宮廷文化も含みながらも多彩な内容を包含する室町文化を形成して行く様、などが説得的に述べられている。

第6章は、戦国仏教に関する従来の研究は、①新仏教の全国的展開と旧に対する優位、②戦国大名による寺院・僧侶らの統制と組織支配、③近世仏教墮落論・国民宗教論の議論とも関係する一向一揆・法華一揆の現出と圧迫、であったことから、これら三点の再検討が目的とされる。このうち、近世仏教の評価などとの関わりで検討された③について述べるなら、執筆者の神田氏は、まず一向一揆を宗教運動とは言えないことを論証する。そして、信長が一向一揆へ抑圧姿勢をとったという理解は根拠がなく、一揆の大名との交戦も反権力性の証しではないとし、一向宗は王法と仏法の棲み分けを主張した蓮如の教説遵守の姿勢が目指されていたとする。とすると、教団が武装蜂起したために統一政権の弾圧を受けた、という従来の理解は成り立たなくなり、それとの関連で説明される江戸幕府による宗教統制の意義づけも自ずと再検討が迫られることになる。そうした問題を提起した点が、本章の意義といえよう。

以上、本巻を中世仏教の枠組みという視点から振り返るなら、『旧』は「新仏教とその展開」という枠組みであったのに対し、『新』は新仏教に一定の記述は割いてはいるが、全体として新仏教も含む「顕密仏教とその展開」という枠組みであることが知られる。その点では、中世前期においては顕密仏教の研究の蓄積もありそうした視点での叙述が成功している。しかし、後期は顕密仏教研究が前期よりも遅れていることもあり、まだ検討の余地が残されている、というのが正直な感想である。

(3) 近世編

近世仏教に対しては、いまだに形式化・墮落していたという評価が根強

い。『旧』においては前述のとおり、監修者である笠原氏は、生き生きしていた中世仏教が江戸期に枯渇したと評価していた。それは、日本仏教の頂点が鎌倉仏教で、それと対比すると江戸仏教は輝きを失い衰退していた、という理解に裏付けられた認識といえよう。それは、恐らくは笠原氏自身が抱いていたであろう「宗教のあるべき姿」の基準に照らしての評価であったといえる。歴史学の分野で特に文化史部門における個々の事象は、往々にして「あるべき姿」のような基準を立てて評価されがちである。したがって、基準の立て方次第では異なる評価がなされるのは当然といえる。

本巻の編集協力者である林氏は、近世仏教＝墮落とする時代は終わり、民衆の生きた仏教信仰や生きた寺院の機能を探求することにより、仏教が生き生きと機能していた面を明らかにすることが重要とする。氏は、この五十年学界において近世仏教＝墮落論を支持する研究者はだれ一人としていないのに、亡霊のように語られてきた、とする。

確かに、圭室諦成氏はその著『葬式仏教』（1963年、大法輪閣）で、寺檀関係を寺院の墮落とする評価は俗論であるとし、仏教は葬祭化により庶民の信仰を独占した、という評価を既に与えていた。また、『旧』においては編集者の笠原氏は近世仏教を「枯渇化」と、否定的な評価を与えていた。しかしながら、実際の叙述においては、宗教の庶民化が推進されたこと（『旧』①）や、神仏への信仰の諸相を通じて仏教の民衆生活への定着と意味ある機能を果たしていた事実を積極的に評価する（『旧』③）、といった視点が立てられていた。

以上の点で、林氏の言うことは事実であるが、研究者の多くは近世仏教墮落論の呪縛から抜け切れず今日に至っているのである。本巻は改めて近世仏教の再評価を目指したもので、「民衆仏教の定着」という巻名には、中世ではなく近世こそが民衆仏教である、という主張が込められている。

以上のような近世仏教の再評価に深く関わる章が、2章・6章であろう。第2章は近世仏教の特質が網羅的に指摘されている章である。それらを、箇条書き風に抜き出すなら、①近世仏教は幕藩権力が作り上げたものではなく、中世末期に各地で重層的に存在した地域権力・民衆・寺院が相互に

関係形成を試みる中で出来上がった。②僧侶と世俗世界の距離が縮まったこと。③僧の墮落と教学研究・修行の形式化があったことは否定できないが、死後の供養が保証され仏教教学研究が精緻に発達した側面を過小評価すべきでないこと。④近世確立期は日本仏教の方向性が作り上げられた時期で、その特性は「世俗化した日本仏教」ということである。⑤本末・檀家制は幕府により打ち立てられたというよりも、寺院や民衆側の動向を権力者が追認したのが実態に近いこと、などである。さらに、近世仏教の成立基盤として、日本は仏国・神国であるという認識、近世宗教秩序の完成された形である東照宮の意義、などを踏まえるべきとする。これらは、古代・中世とは異なる近世的特色が指摘されたものとして受け止めるべきと思われる。

第6章は、まず古代から近世までの葬式について概観し、近世に定着した葬式仏教は今日の日本仏教のありようを大枠として規定したもの、という理解で叙述が進められる。そして、葬式仏教が寺檀制度・本末制度・先祖祭祀の上に成立していた点が中世までのそれとの違いであり、宗門人別帳には一家複数寺檀関係が見られることに注目すべきとする。そして、仏教・寺院・僧侶が支配機構の最末端に位置していることが仏教の庶民への浸透の実態であるとする。このことは、幕藩権力の庶民支配の結果ではなく、権力の関わりはむしろ後発的であったと、第2章と同様の評価をする。さらに、幕藩制崩壊後も葬式仏教が存続した理由を、葬式仏教は政治的ではなく社会的に形成されていたことに求めている。

葬式仏教については日本編においては力を入れている分野で、第5巻第2章及び第11章の2でも扱われている。葬式仏教は仏教の今後を考える際の鍵になる、という点では認識が共通していると思われるので併せて参照されたい。

他章に触れる余裕はないが、近世仏教の積極的評価に関わる重要と思われる指摘のみを取り出しておきたい。①反仏教の言説の中に平等思想など仏教本来の可能性が示されていることに注目すべきこと（第3章）、②普寂・富永仲基が近世仏教思想の到達点の一つで、仏教思想の近代化の始点

の一つでもある(第4章),③近世は勸進の宗教者が多彩に花開いた時代で、彼らの活動を保証した寺社奉行との関わりに中世の勸進宗教者の違いがあり、その点が近世の勸進宗教者をめぐる課題であること(第5章), などである。

以上、近世仏教の再評価に関わる点を中心として紹介してきた。それらを改めて反芻するなら、今後は「葬式仏教」などといった表題を使用せず、本巻の巻名のように堂々と「民衆仏教」というタイトルを掲げるべきという思いを強くした。

(4) 近現代編

編集協力者の佐藤弘夫氏は「序」で、近代は研究史が薄く前近代のように見直しとなる歴史像が明確ではなかったとし、目を向けるべきは、教理の合理化により見落とされた諸要素(伝統教団の実態と公教育などに果たした役割、戦前・戦中の日本の海外侵略と一部の仏教教団との関わりなど)であるとした上で、近代仏教はこれまでの鎌倉仏教に代わるもっとも刺激的な対象である、とまで主張する。

その近代仏教の定義・対象などを述べた章である第2章に触れておきたい。そこでは、近代仏教の対象を、在家者を主な担い手とする仏教集団による仏教改革の思想や運動とし、課題は明治中期から大正期におけるそれらの形成と展開を検討することであるとしている。その検討の結果として、①近代仏教成立の指標は、個人的な内面信仰の確立と公共空間における社会活動の展開にあること、②近代仏教とは、西洋のプロテスタンティズムに影響を受けた「宗教」概念に根差したビリーフ重視と、それに伴う教理・実践・組織の合理化の傾向が顕著であることを特色とする明治維新以降の仏教のあり方であること、③担い手の中心は仏教系知識人の在家者であったため、運動が伝統教団外になったり教団内でも中心部ではなく周辺部の動向であった、という特色を指摘している。

本巻では特に「現代」という区分は立てられてはいない。そこが『旧』とは異なるところであるが、『旧』は戦後を「現代」としているのでそれと

対応する第6章に少々触れておく。そこではまず新宗教について、戦後の中心は創価学会・立正佼成会に代表される日蓮系の教団であった。しかし、それらは時代と共に魅力を失い、代わって勢力を拡大したのが真如苑・阿含宗・幸福の科学などの中規模教団であった。これらは集団の結束よりも個人の修行・修養を重視しており、そこにオウム真理教も含めた新宗教の個人化の進行を見る。そして、現代の宗教の特色として、①スピリチュアル・ブーム、②キリスト教・イスラム教への改宗が少ないこと、③そのことと裏腹に、神道と仏教が習合した伝統的信仰のあり方に変化は見られないこと、④脱先祖供養・脱葬式仏教の方向に向かおうとしていること、などの傾向があることを指摘する。

戦後は新宗教の記述が多くなることは避けられないことであるが、『新』は仏教系に絞り最近の状況まで触れ、仏教信仰の動向に即した記述がなされていることが目新しいといえよう。

近現代仏教は定義・対象も含め研究は現在進行形でもあるので、その枠組みについては模索中、というのが実態と思われる。ただ、『新』は『旧』に比較すると多彩な課題が追求されていることが知られる。そうした意味で、今後の枠組み作りには欠かせない一冊となるであろう。

おわりに

書評とも紹介ともつかない中途半端な内容になったが、新旧『アジア仏教史』の比較を通して、日本仏教通史の枠組みの変化について確認してきた。『旧』に示されていた教科書的枠組みは消滅し、新しい枠組みが示されていたことが知られた。これが定説化しさらに教科書などに反映されるのはいつの日かは推測が難しい。しかし、編集者である末木氏が自負しているように（日本編第5巻「序」）、基本方針として掲げられた目標は十分達成され、『新』は最新の仏教史研究を取り入れた信頼し得る通史になっていることは間違いない。それは個々の執筆者の力量によるものだけではなく、日本仏教研究会及び日本仏教総合研究学会による日本仏教史の見直

しに関する検討の積み重ねが支えになっているからであると思われる。

今後本書は、それぞれの研究者が個別に行う仏教史研究が通史の中でどのような位置を占めることになるのか、ということを見定める際に基準となる信頼し得る通史としての役割を果たして行くことが期待される。

注

- (1)本書は古代と近世編は1987年、近代は1990年の順で刊行されたが、中世は事情により1998年と大幅に遅れ、かつ分担執筆となった。
- (2)本書の10巻目は年表編で1999年刊行であるが、他は1980年代に刊行を終えている。また、11巻目(日本仏教史図典編)は担当の景山春樹氏逝去(1985年没)のためか未完のままである。
- (3)ただし、第5巻第3章「南都仏教の復興」については、「鎌倉仏教の活動に刺激されて活発な動きを展開した」という評価がされている。ここで述べられる鎌倉仏教は言うまでもなく新仏教である。
- (4)本書は新仏教を中心とした鎌倉仏教の記述量が全体の3割強を占めている点で、典型的な鎌倉新仏教中心史観に立っている。なお、『体系日本史叢書』は面目を一新して『新体系日本史』として刊行が進められている。第15巻が『宗教社会史』として予定されているが、本稿校正時点では未完である。旧体系と比べると、新体系では文化史の巻に『美術社会史』のように全て「社会史」という表現が付されていることが特徴である。宗教の場合それがどのようなことなのか、刊行された時点で旧との比較が求められよう。
- (5)『日本史における価値観の系譜』(1972年、評論社)、『原典・日本思想史』(下出積與氏との共編、1974年、評論社)、『日本宗教史』I II(1977年、山川出版社)など。なかでも『日本宗教史』は『旧』のダイジェスト版的内容となっている。『日本宗教史』Iに鎌倉仏教は記述されているが、全体の4割強と前述の『体系日本史叢書』「宗教史」よりもさらに比重が増している。
- (6)1972年から刊行が開始され、1980年までに別巻2巻を含め37冊刊行された。全100冊が目標であったとされるが、新保満『日本の移民』(1977年)に「64」という通し番号が記されていることから知られる。
- (7)全19冊が予定されていたが、1972年から1987年までに11冊刊行され、それ以後は途絶えている。
- (8)日本宗教史研究会は1962年に圭室諦成氏(1966年没)を中心に結成され、夏季ゼミナール形式の研究活動が続けられた。その成果は『日本宗教史研究』

5冊(1967～1974年、法蔵館)、笠原一男編『日本における社会と宗教』(1969年)、同氏編『日本における政治と宗教』(1974年)、下出積興編『日本における倫理と宗教』(1980年、いずれも吉川弘文館)として結実した。その後も活動は継続され、成果は『日本宗教史研究年報』として7冊刊行されるに至り(1978～1986年、佼成出版社)、その年報に掲載されていた研究文献目録を母体として『日本宗教史研究文献目録』が2冊刊行された(Iは1995年、IIは2000年、共に岩田書院)。日本宗教史研究会に集った個々の研究者の活動は現在まで継続されている。しかし、笠原氏を中心とした会としての活動が活発であったのは1960年代後半から1980年代前半位まで、ということになる。その後、1992年に装いを新たにした日本宗教史懇話会が発足し、毎年1回のサマーセミナー形式の研究活動が継続されている(2011年時点で通算20回を数える)。

- (9)この点に関しては言い古されていることで、今更の感もあるが、念のため述べておく。手元にある山川出版社の『詳説日本史』の鎌倉仏教に至る日本仏教史の記述を比較すると、1964年版(宝月圭吾・藤木邦彦編)、1994年版(石井進・笠原一男・児玉幸多・笹山晴生編)、2010年版(石井進・五味文彦・笹山晴生・高埜利彦編)共にほとんど同文といってよい。編集者としての笠原氏の名は1994年版にはみられるが、執筆者としては1964年版には既に加わっていた。恐らく『詳説日本史』における宗教の記述は笠原氏によるものと思われ、それは時期的にも前述の『体系日本史叢書』「宗教史」で示されていた構想に基づくものであったことが知られる。氏が執筆者でなくなった現在においてもその枠組みが踏襲されていることになる。鎌倉仏教に限定してみても、こうした枠組みは他の出版社の日本史教科書も記述量の多寡は別としてもほぼ同様である。なお、この問題に関しては、拙稿「古代・中世仏教史の枠組みについて——教科書と概説書の間——」(『歴史研究と社会科教育——坂口勉教授退官記念誌——』所収、北海道歴史教育研究会、2001年2月)でも論じておいた。

- (10)通史に組み込みにくいテーマは、前述のように『新』では改めて第5巻で取り扱われている。その構成を示すなら、次の通りである。

〈『新』第5巻の構成〉

現代仏教の可能性(末本文美士編)(2011年、481頁)

①大蔵経の歴史と現在(永崎研宣)

②民俗と仏教——「葬式仏教」から「死者供養仏教」へ——(池上良正)

- ③科学と仏教——『般若心経』をめぐる——(金沢篤)
- ④教育・福祉と仏教(芹川博通)
- ⑤社会参加と仏教(ランジャナ・ムコパディヤヤ)
- ⑥現代日本の仏教とジェンダー——フェミニスト仏教は開花するか?——
(川橋範子)
- ⑦医療と仏教(新村拓)
- ⑧仏教修行の意味と創造(町田宗鳳)
- ⑨アメリカに渡った仏教(ケネス・タナカ)
- ⑩日本仏教における「批判」(袴谷憲昭)
- ⑪これからの仏教(奈良康明・沖本克己・末木文美士・石井公成・下田正弘)
(コラム類は無い)

民俗, 科学, 教育, 福祉, ジェンダー, 医療など様々な分野における仏教の関わりと役割について章がたてられていることが知られる。第4巻までにコラムとして扱われていた項目の拡大版ともいえる内容である。中でも①②④⑦は部門史のスタイルが取られており, 通史の欠を補う役割を果たしている。そうした点で, こうした分野を通史と一端切り離して別個にまとめることは一つの有効な方法であることが知られる。ただ, コラムで取り上げられた項目も含めて第5巻は, これまでの日本仏教通史に欠けていた「日本において仏教とは何であったのか」という問いへの一つの解答になり得る内容ともいえる。そうした意味で第5巻で掲げられているようなテーマを通史の中にどのように組み込むのが今後の課題といえよう。

- (11)通史ではないが, 井原今朝男『史実中世仏教』第一巻(2011年, 興山舎)は, こうした関心を満たす仏教史として今後の展開が期待される。
- (12)家永三郎「書評: 平雅行著『日本中世の社会と仏教』」(『日本史研究』378, 1994年2月)。
- (13)ここで筆者の体験を二つほど紹介したい。社会史研究が隆盛し始めていた頃, 史学会で「歴史学と現代」と題するシンポジウムが行われた(1979年11月11日開催)。そこでは石井進氏による網野善彦『無縁・公界・楽』(1978年, 平凡社)をめぐる「新しい歴史学」への模索」という報告を含め, 三本の報告が行われた。討論において井上光貞氏は, こうした社会史研究などについて, これまで歴史学が汲み取ることができなかったことを捉えようとしている点を評価しつつ, 新たな武器が加えられたと認識すべきで無理に統合化し全体

を把握する必要はない，という趣旨の発言をされた（「第 77 回史学会大会報告記事」『史学雑誌』88 の 12，1979 年 12 月）。また，発言を求められた太田秀通氏（1918～2002）も，自分は欲張りだから何でも受け入れ，すべてを体系化したい，という趣旨の発言をされた。両氏の発言は，社会史研究も歴史解明のための一つの視点であり，それがすべてではない，という趣旨で共通している。仏教史の問題に戻すなら井上氏にとって顕密体制論などは一つの見方に過ぎずそれが全てでも絶対的なものでもない，ということになると思われる。

また，第 32 回仏教史学会学術大会（1981 年 10 月 17 日開催）において平雅行氏は「末法・末代観について——浄土教発達史観批判——」と題する発表を行った。内容は，顕密体制論の立場からこれまでの浄土教中心史観を批判し，末法思想を顕密仏教発展の一モメントとして位置付けたものであった（本報告は「末法・末代観の歴史的意義——浄土教中心史観批判——」と題し，1983 年に『仏教史学研究』25 の 2 に発表された。後に同氏著『日本中世の社会と仏教』に収録された）。その発表に対し，井上氏よりも少し若い世代になる蘭田香融氏（1929～）が，「平氏の発表したような見方もできるが，それが全てではない」という趣旨の発言をされていた。井上・蘭田両氏の発言は，新しい見方が提示されてもそれまでの見方を変える必要はなく，その視点を従来の見方に付加して全体を考えて行くべきである，という主張である点で共通している。